

# 新たな乳用牛の改良増殖目標の主な変更点(案)

参考2

## 現行目標(H32年度)

- 多様な品種の改良と増殖の推進。
- 繁殖性や飼料効率等の改善が期待できる泌乳持続性の高い乳用牛への改良と生涯生産性に着目した経営を支援。

## 課題、方向性

- 経産牛1頭当たりの乳量は、近年の猛暑等の環境変化や繁殖性の低下等の影響により、遺伝的能力が十分に発揮されておらず伸び悩み。
- 輸入飼料価格が高止まりで推移する中、放牧を含む国産飼料の利活用を高めることが必要。

## 新たな目標(H37年度)

- 生涯生産性に配慮しつつ、1頭当たりの乳量の増加に着目した改良の推進。
- 飼料利用性の改善が期待できる泌乳持続性に着目した改良の推進。
- 経産牛の供用期間の延長、性判別技術の活用による優良後継牛の効率的な生産等の推進。

- 定性的な目標**
- 能力
    - 乳量・乳成分  
乳量の向上、乳成分率の維持に努める。
    - 繁殖能力  
初産月齢の早期化に努める。必要以上の空胎期間の延長を避ける。
    - 泌乳持続性  
泌乳能力向上を図りつつ、繁殖性、生涯生産性等の改善を同時に推進するため、泌乳持続性に着目した改良。
  - 体型  
長命性との関係が明らかな乳器と肢蹄の改良を重視し、生涯生産性の向上を図る。
  - SNP(一塩基多型)遺伝子解析技術の活用。

- 能力
  - 乳量・乳成分  
乳量の向上、乳成分率の維持に努める。
  - 繁殖能力  
分娩間隔が長期化している個体に対する適切な飼養管理により、必要以上の空胎期間の延長を避ける。
  - 泌乳持続性  
泌乳持続性の高い乳用牛の改良を推進。
- 体型  
長命連産性の向上のため、乳器及び肢蹄に着目した改良と併せて、搾乳ホットに適した乳頭配置等にも配慮。
- 遺伝的能力を十分に発揮させるため、牛群検定から得られる情報やボディ・コンディション・スコアを指標とした飼養管理の改善。
- 酪農家の多様なニーズに合致した国産種雄牛(放牧適性の高い種雄牛等)の簡易な選択システムの充実。
- SNP技術を活用したゲノミック評価の精度向上と後代検定の効率化。

- 定量的な目標**
- 〈雌牛〉(遺伝的改良量)  
現在(H20)の改良量を引き続き維持
- 乳量: (+113kg/年)
  - 乳脂肪: (+2.6kg/年)
  - 無脂乳固形分: (+9.2kg/年)
  - 乳蛋白質: (+2.9kg/年)
- 〈種雄牛〉(遺伝的改良量)  
現在(H20)の改良量を引き続き維持
- 乳量: (+137kg/年)
  - 乳脂肪: (+3.1kg/年)
  - 無脂乳固形分: (+10.9kg/年)
  - 乳蛋白質: (+2.9kg/年)

- 遺伝的改良量
  - 乳量  
生涯生産性(泌乳能力と体型のバランス)に配慮しつつ、1頭当たりの乳量の増加に着目した改良の推進に資する目標値の設定を検討。
  - 乳質  
表型値をこれ以上高める必要は無いものの、現在の改良量を引き続き維持する目標値の設定を検討。
- 表型値  
雌牛の目標については、表型値による目標値を設定。